

じやりみち

…被災地支援情報…

第111号 発行日 2018.4.3
被災地 NGO 協働センター
〒652-0801 神戸市兵庫区中道通2-1-10
TEL:078-574-0701 FAX:078-574-0702
HP:<http://ngo-kyodo.org/>
Facebook:<https://www.facebook.com/KOBE1.17NGO>
E-mail:info@ngo-kyodo.org
口座番号:01180-6-68556(郵便振替)

東日本大震災から七年 福島を訪ねて

3月16～18日の3日間、熊本県・西原村の方々と一緒に福島県を訪問しました。お話を聞かせていただいたのは、浪江町と富岡町の方々です。昨年の4月1日から一部の区間の避難指示が解除になり、元の地域に戻る方もいればそうでない人もいたという地域です。

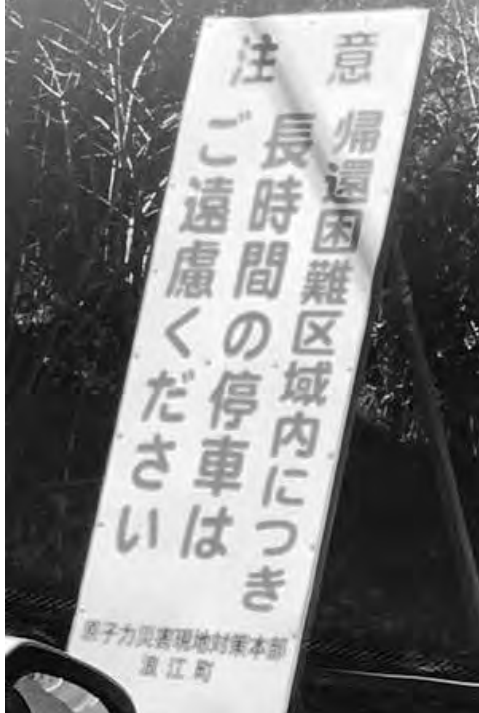
7年という時間は、人々の生活を変えてしまうのに十分な時間でした。中には避難先の場所で、家を建てて帰還しないという人もいます。帰還した先の地域には、病院や学校、スーパーなどの生活インフラが十分に整備されていないという状況もあります。学校などは、再開をしているものの、子どもの数が5～6名だったりということもあって、小さなお子さんを抱える方々は、子どもたちの教育環境などを考えると、なかなか元の地域に戻るのには難しいという意見が強いようです。お話を聞いた浪江町の方は、「7年たったけど復興はまだまだ先が見えない。2020年で終わりにになってしまうのではないかという不安がある」ということをおっしゃっていました。

富岡町の方が入居されている郡山市の仮設住宅でもお話を聞きました。この仮設住宅は夏頃には閉鎖される予定で、今残っている人はほとんどの人が次の住まいが決まり、富岡町に帰るとい人が多いそうです。家をリフォームして戻られる方もいる中で、「周りにほとんど人が帰ってきていないから、一人だと不安だし復興住宅に入居する」とおっしゃっている方がいたのが印象的でした。また仮設にお住まいの方は「家に戻れるから復興が見えてきた。熊本はまだまだ大変だと思う」とお話されていて、浪江町の方とまた違った捉え方をされていたことも印象に残っています。



福島県の浜通り（沿岸部）を走る国道6号線は開通し、自動車であれば通行することができます。（バイクや徒歩は禁止）国道の両側は帰還困難区域のため、多くのバリケードが設置され、未だ立ち入ることができません。少し走るとそうしたバリケード群から人々が暮らすことのできる町へと入ります。こうした境目について、行政の区割りを採用しているから、実際は解除された地区よりも線量が低くても帰還困難区域になっている場所もある、という話も聞きました。

復興とはなんなのか？様々な捉え方があるということを経験しました。特に福島は地震・津波だけでなく原発事故という特殊性があり、特にその捉え方が多様であると感じます。福島の方々と出会って、一人ひとりの事情や気持ちにどれだけ向き合えるのか、そこから始めなければ復興は見えてこない、ということを経験して改めて気づかされました。（頼政良太）



特集
東日本大震災

七年目の被災地
（長引く避難生活の現状）

阪神・淡路大震災から23年、東日本大震災から7年の月日が経ちました。阪神・淡路大震災の被災地では「借り上げ復興住宅」の退去問題で被災者が神戸市に訴えられるという顕著な復興災害が起きています。一方、東日本大震災の被災地各地で造成が行われ、住み慣れた街とは違う景色が広がっています。また仮設の入居が伸びたり、再建した新居では環境の変化から新しい土地に馴染めず、孤独を感じ、不安とストレスから体調を崩している人も少なくありません。

3月11日の朝日新聞の社説に「心の傷が癒えるとは、亡くなった人を忘れることでも、記憶にふたをすることでもない。被災者が、いまの自分を形づくる大切な一部として、過去を振り返れるようになること。そのためには、周囲による息の長い支えや見守りが必要だ。被災者一人ひとりの心のそばにいて、時が満ちた時に語れる相手となる。そういう存在でありたい」と伝えていました。

いつものように3月11日が近づくにつれて、現実には被災者の心も落ち着きをなくしていきます。報道は震災のことばかり、否が応でも津波のことを思い出さずにはいられません。「3月11日を前にまた、津波のこと思い出して毎日泣いているよ」「親戚いっぱいなくしてさ、テレビ見

れば津波のことばかりで辛いよ。子どもかわいそうだから、すぐ消すよ。」「あの日、助かった孫が急に熱を出して、準備途中の医療のテントに飛び込んだら、神戸の看護師さんでね。とってもお世話になったの。ありがたかったよ。大阪の消防車もずーっと列をなして、一番先に来てくれたんだよ。阪神・淡路大震災の時は何もしなかったのに、たくさんお世話になってね。孫がね、いつか人の役に立つ仕事がしたいと言っているんだよ」と涙ながらに昨日のこのように、あの日のことを話してくれました。

他方、福島原発事故はいまもなお緊急事態宣言が出たまま消息していません。先日、はじめて福島の地を訪れました。報道などで、少しはわかっていたつもりですが、現場を実際にみると、正直言葉を失いました。あの時からまるで時間が止まり、地震の直後そのままの身着のまま、家主を失った家が立ち並んでいました。帰還困難区域では、各民家の入り口、店舗の入り口などにバリケードが設置されていました。帰還困難区域の横には、無造作に線を引いたように、帰還を解除された地域もありますが、帰還している住民も数件確認できましたが、スーパーやガソリンスタンド、病院や学校など、とてもじゃないが人々が生活する環境は整っていないような状況でした。



■大槌町役場

「浪江、富岡、飯館、葛尾の4町村は、避難先から戻った人口がいずれも1000人未満で8～9割減少したままだ。(中略)中心部で昨年3月末に避難指示が解除されたが、今年1月末の人口は震災前の2.3%の490人とどまる。」(読売新聞2018/3/10)と伝えています。

町を車で走ると、工事用の車両やパトカー、工事関係者がほとんどで、人影はありません。そして、放射能を測定する機械音が時々「ピー、ピー!!」と静けさの中に響き渡ります。

「原発さえなければ」という言葉が頭をぐるぐる巡ります。

いわき市内の古滝屋旅館に宿泊した際に、館長さんにお話を聞きました。この旅館は創業元禄8年で300年の歴史があり、3世代に渡って泊りにくるお客さんが多かったそうです。以前はおじいちゃんやおばあちゃんがお孫さんを連れてきていたそうです。けれども、原発事故が起きてからは、若い人たちは放射能の影響を考えその客足が途絶えてしまったそうです。これまではいわきでとれた新鮮な魚などを振舞っていたそうですが、いまは地物を出すことができず、県外から仕入れているそうです。周辺のホテルでも、素泊まりが多く食事を提供しない宿が多いそうです。これもなにもかも原発事故による放射能の影響です。

また原発事故が起きた近くにはたくさんのお酪農家も暮らしています。原発事故が起きてから、ペットや伝統行事・相馬野馬追に欠かせない存在の馬はすぐに救出されました。けれども、経済動物である牛や豚、鶏は「食の安全を守る」という大義の下、国は区域外への移動を禁止、全頭殺処分を命じまし



■希望の牧場の牛

た。しかし、人間の身勝手さで起きた原発事故の犠牲になった家畜たちを経済価値がなくなったからと言って、殺すことを拒み続け、飼いつけている酪農家もいるのです。その一つ浪江町の「希望の牧場」に行きました。そこには、一見何の変哲もない牧場に牛たちが草を食べていました。でも、牧場の入り口には、「殺処分反対」「決死救命」などと書かれた看板とともに、牛の頭の骨が置かれていました。まるで牛たちの叫び声が聞こえてくるようでした。それらの牧場が松原保監督の手によって『被ばく牛と生きる』というドキュメンタリー映画になりました。映画の中では”生きることを許されない”牛たちを飼いつける意味とは何なのか。牧場の隣の空き地が汚染物の仮置き場となり、飼いつけた牛たちを殺処分するという苦渋の決断をした酪農家も紹介されています。中には「もう生き物は飼わん。こんな想いは二度としたくない。原発事故が起きる前は、豊かな自然に囲まれて、べこ(牛)飼っているのが本当に幸せだった。」と語っていた酪農家がありました。生きがいを奪われ、牛や土地まで奪われた酪農家の深い心の傷を私たち消費者はどう受け止めるのか。7年経った今も、存在を

認められないのちと向き合っている人たち、帰りたくても帰れずに避難生活を送っている人たちがいることを忘れてはならないとあらためて感じた7年目の被災地訪問でした。(増島智子)

インドネシア における地域 防災力向上の ための活動

寄り添い、つなぐ、 女性の パワー

前号(110号)の「じゃりみち」でもご紹介させて頂いた「インドネシアにおける地域防災力向上のための活動」について、第2弾として第3次派遣(2018年2月上旬)での訪問で見えてきたこと、聞いてきたことをお伝えしたいと思います。

実は、前回訪問したのが今年の11月中旬だったのですが、私たちが日本に帰国した直後に、なんとモデル村であるジョグジャカルタ特別州クノンプログ県ケボンハルジョ村に地すべりが発生したのです。この地すべりで同村の隣の村の住民がお一人亡くなられました。

このモデル村には防災フォーラムがあり、33名中5名が女性です。男女の比率としては女性が占める比率は少ないのです。その女性たちの活躍には目を見張るものがあります。先の地すべりの発生に対する女性の働き振りを紹介します。女性スタッフは、記録とロジスティック担当となっているようで、救援物資の手配、避難所の運営、災害の記録などの仕事をされます。感心したのは、時にはショベルカーなど重機の手配もされるということです。男性が崩れた地すべり後の処理をしている間、女性スタッフは前述したような仕事をし、即座に被害状況はじめ避難所が開設されたこと、救援物資を配布することなど、村の住民に知らせます。この記録は役場の秘書の女性が担当されているのですが、内容がすばらしいので県の防災局からも高い評価を受けているということでした。

さてインドネシア共和国では、政府の政策の一つであるPKK(家族福祉運動)という女性運動があることは前号でお伝え致しました。このPKK運動が、地域防災力向上にどのように関係していくのかがポイントになります。PKKは、日常生活の中で健康、教育、子育て、・・・などという活動を通して、お互いが助けあい、支えあうという取り組みです。

またこの村には10の準村がありますが、その準村の女性リーダーにお話を聴くと、この女性は朝早くから生業である農業に従事しつつ、菓子作りにも精を出しておられ、その上で村の女性たちの悩みの相談相手になるということも日常的にされています。また「アリサン」という、日本でいうところの「頼母子講」も運営しており、金銭面での支えあいのお手伝いもされていま

す。「大変、忙しいですね!」と言ったら、「毎日のことではないのでそうでもないですよ!」と笑いながら返事が返って来ました。いやはや、なんと女性は逞しいのだろうと感心させられた一幕です。しかし、考えてみるとこうして防災を意識しているのではなく、日頃の暮らしの中での支えあいや助けあいがしっかり行われていると、いざ災害が発生したときにも、こうして培った支えあいは生きてくるのではないかと痛感します。

さらに、年に一度の大きな村の祭りがあり、伝統文化をしっかりと継承しています。また、「デザ・ダナ」これも政府の政策の一つですが、各家庭の空き地に野菜を植えようという運動もあります。こうして、日頃の文化的アプローチや経済的アプローチも、実は防災につながる活動ではないかと気づかされます。

村長は「この村では大切なことは7世代先まで伝えよう!」という合言葉があります。

これが村の誇りですと笑顔で話されたのが印象的でした。(村井雅清)

(*このプロジェクトは、2017年6月7日から2018年6月6日までの1年間の期間として、JICA草の根技術協力事業として支援を受けています。)



■ PKKの活動

もう一つの生き方、 もう一つの働き方を考える

2017年度
寺子屋セミナー



■第6回ゲストの鈴木さん

2017年度の寺子屋は、「こんな生き方あったんだ!? ～～農業・漁業・林業・NPO/NGO・僧侶…多様な働き方・生き方を通して見るもう一つの社会～」と題して、全8回のシリーズを開催しました。第1回は「地域おこし協力隊から農業支援へ」河井昌猛さん(西原村百笑応援団)、第2回は「まちづくりでこだわって被災地に関わり続ける」宮定章さん(認定NPO法人まち・コミュニケーション)、第3回は「これからのソーシャルセクターを担う若者たちへ」大福聡平さん(NPO法人しゃらく)、第4回は「教育にこだわり活動を展開する」中山迅一さん(NPO法人まなびと)、第5回は

「被災地に飛び込み仕事として復興に貢献する」斉藤誠太郎さん(NPO法人ISHINOMAKI2.0)、第6回は「僧侶として、住民として被災地に関わるとは?」鈴木隆太さん(曹洞宗東禅寺)、第7回は「新しい地産地消エネルギーに挑戦する」井上保子さん(非営利型株式会社宝塚すみれ発電)、そして第8回はまとめとして、「もう一つの社会を生み出す働き方、生き方とは?」山口一史さん(ひょうご・まち・くらし研究所)と多くの方々にお話をいただきました。

講師の方々、様々な出会いの中で今の働き方や生き方が見えてきている、という方や、今までの仕事のやり方では何か違うのではないかと感じ、新しい働き方を始めたという方もいます。第4回の中山さんは、たまたま行ったタイで、タイに残って回った時にみんな楽しそうということを感じた。仕事しながらスタッフとおし

ゃべりしてたり、営業中に漫画を読んでいた。こういう風に働いたらすごく楽になるんだろうな、自分は年収100万円とかでしか見ていないと気づいた。」とおっしゃっています。また、第6回の鈴木隆太さんは「出会いや縁に突き動かされてきた。板宿の行きつけの飲み屋のマスターがよく「なるようになってんねん」という口癖だったけど、そういうもんなのかなあと思う。」と様々な出会いについてお話をいただきました。

皆さんに共通していることは、「人」を見ているということです。第1回の河井さんは、「一番心が打たれたのは、人々。家の前で動けない人やがれきを片付けをしている人を目の当たりにして、心が揺さぶられた。」とお話いただきました。また、第2回の宮定さんは「UR都市再生機構に行ったが、人を見ずお金の計算だけで建て替えをしていくだけだったので、人を見ないところが嫌で長田に戻った。」と語っておられました。第7回の井上さんのお話にも「人」そして「暮らし」を守るために地産地消のエネルギーに取り組むというお話を随所にいただきました。やはり一人ひとりにこだわる、ということに、当NGOのポリシーと共通する部分があるように感じまし



■第8回寺子屋の様子



■第1回ゲストの河井さん

「これは仕事か？」と言われた。一人ひとりに対応することは大事だと思っ
ているが、被災者が自分にお金を払うことはない。」と苦勞をお話いただきました。ま
とめの回での山口さんは「助け合いの社会（ボランティア社会）、こうした社会を作っ
ていかないと、若い人材は向こう側（もう一つの社会）

通じて改めて確信しました。（頼政良太）

*紙面の関係で全ての講師のご意見をご紹介できないことをお詫びいたしま
す。

た。
農業では生産者である農家さんや消費者の方々の声、会合に出てこれない被災者の想い、子どもたちの個別の事情、地域の住民一人ひとりの声をどう拾い発信するか、などもう一つの社会のキーワードは「一人ひとり」に「向き合う」というところがスタートなのではないかと今回の寺子屋を通して感じました。

一方で、そうした生き方を仕事に、という部分には難しさもあります。第2回の宮定さんは「指導教官には「そ

に行ってしまう（現在の社会との接点
がなくなってしまう）。社会を変えるには、やっぱり「人」。システムや構造ではない。」とおっしゃっています。もう一つの生き方・働き方をしている若い人材が、現在の社会でも生き生きと、そして十分に食っていけるように、活動をしている一人ひとり（若者たち）を支えることが、現在の社会を変革していくのでしょうか。一人ひとりが大切にされるもう一つの社会は、担い手同士が切磋琢磨し、さらに世代を超えて支えあい、育ち合うところから始まっていくということ、今回の寺子屋を



■第7回のすみれ発電の管理する発電所の様子

■事務局ボランティアも募集しています！

私たちと一緒に活動して下さるボランティアさんを随時募集しています！

初心者の方も全く問題ありません。ボランティアでの活動を通して、NGOや市民社会、防災・減災のことも学ぶことが出来ます。やる気のある方大歓迎です。ぜひお越しください。



当センターの姉妹団体「CODE 海外災害援助市民センター」の活動にもご協力よろしくお願ひします。

■編集後記

最近はずっかり春らしくなってきました。今年は何年になく、桜の開花が早くお花見シーズンがあつという間に終わってしまいそうですね。私は花粉症との厳しい戦いの季節が幕を開け、毎日激闘を繰り広げています（笑）

この春までの冬のシーズンは、研修が多い時期でもあります。災害に備えての研修に呼んでいただくことも増えてきました。災害が起きた後に、スムーズに復旧・復興を進めていくためには、ボランティアの力は欠かせません。

被災地での支援活動に携わっていて、いつも思うのは事前の備えが大切であるということと、それを柔軟に使う臨機応変な対応の大切さです。災害が起こってからでは後手に回るしかありません。あまり構えて準備する必要はないですが、日常生活の中ですこしでも災害に対しての準備や意識が出来ればいいなと思っています。（頼政良太）

■入会・カンパのお願い

被災地 NGO 協働センターでは、会員を随時募集しています。普段なかなか活動にご参加できない方でも賛助会員等で活動に間接的にご参加いただくことが出来ます。活動カンパ、事務局カンパも随時受け付けています。下記の振込先によるしくお願ひ致します。

- ★団体会員 年会費 ¥ 10,000 × 1口以上
- ★個人会員 年会費 ¥ 3,000 × 1口以上
- ☆団体賛助会員 年会費 ¥ 10,000 × 1口以上
- ☆個人賛助会員 年会費 ¥ 3,000 × 1口以上
- ☆自由選択会員 年会費 ¥ 任意の額

■郵便振替 加入者名：被災地 NGO 協働センター
口座番号：01180-6-68556

■ゆうちょ銀行

支店番号：一一九（イチイチキユウ）支店/店番：119
当座 0068556 / 受取人名：ヒサイチ NGO キョウドウセンター

■クレジットカードでのご寄付

クレジットカードでも会費やご寄付をしていただくことができます。下記 URL もしくは右の QR コードからお願いします。

<https://www2.donation.fm/kobe117ngo/form.php>



第61号 2018.4.3



発行所：被災地 NGO 協働センター 〒652-0801 神戸市兵庫区中道通 2-1-10
 TEL:078-574-0701 FAX:078-574-0702 HP:http://ngo-kyodo.org/



東日本大震災7年を迎えた被災地には、造成が遅れ仮設暮らしが延長になった人、病気で入院した人、やっと地鎮祭が終わった人、新しく家ができたから遊びに来てねという人、それぞれの悲喜こもごもの3月11日がありました。

「まけないぞう」の作り手さんは、「津波で人生めちゃくちゃにされた・・・」とぼつりとつぶやきました。黙って聞くしかありません。

また別の作り手さんは、「弟夫婦が避難した体育館で津波に流された。その孫がみんなここからいなくなったら、いったいどこに帰ればいいのか？？」と言われ、その言葉で自宅を再建すること決めたの。ぞうさんのお金はいっさい使わず、ずっと貯めているよ。いつか自宅を再建したら、茶箆筒でも買おうと思っている。」と、そしてこの7年間、まけないぞうをチクチク縫い続けています。彼女は本当はこの春、土地が引き渡される予定でしたが、工事の関係で半年先の9月まで伸びたことをお正月の直前の昨年暮れに聞かされたのです。「そればかりはショックだったわ」と話してくれました。それでも「震災後に、こんなぞうさんさせてもらって楽しいよ～。ほんとありがとね。」と、こうして「まけないぞう」がこの7年間被災者の心の支えになっているのです。



■まけないぞうの作り手さん

また、「まけないぞう」の販売とタオルの集積場として、釜石市の不動寺住職補佐森脇妙紀さんはこの7年間ずっと「まけないぞう」を支えてくれています。

津波の時に、何かできることはないのか悩んでいたそうです。そんな時、教会で物資のお世話をしていた女性たちをみて、女性でもできることがあるんだと感じたそうです。それから、お寺にクリスチャンのドクターなどを受け入れ、寝床を提供しボランティア活動を始めたそうです。また、「もったいない運動」として全国各地から集まる物資を被災者に届けたり、「まけないぞう」の販売やタオルの集積場として、被災地支援を行っています。

「まけないぞう」の活動では、「まけないぞう」のタオルも買って応援するだけでなく、家にあるタオルを集めてひとり一人に声をかけて集めることが大切だとおっしゃいます。日常のつながりがなければ、災害の時にはできないし、きっちりやるのも大変なので、できるだけ細く長くすることもまた大切だと話してくれました。また、3月11日の月命日には“歩き供養”を行い、海まで歩きながら亡くなった人たちの供養をされています。その時、町を歩くと100円玉や、10円玉を握りしめて差し出してくれる人もいます。同時に、「まけないぞう」の100円とその価値の重さをあらためて感じるそうです。「まけないぞう」を手



■不動寺の森脇妙紀さん

にした人がぞうをみながら「手間がかかったでしょう。こんな細かいの大変でしょう」と“生活者の視点”で言ってくれるそうです。「まけないぞう」の手間賃100円はたかが100円、されど100円以上の重みがあると語ってくれます。被災地の現状は、箱モノばかりの復興で生活が見えて

こない、復興は男性目線で、弱者の目線が欠けていると感じているそうです。地元の団子屋さんやお花屋さん、酒屋さんと話していると、もっともっと大切なことがあると実感すると話してくれます。仮設店舗の期限が迫り、行く当てもない店舗や再建したばかりの店舗が続けて2回も水害にあったり、大きな公共事業だけでなく、被災者の身近な困りごとに耳を傾けてほしいのです。

「まけないぞう」の作り手さんの中には、100円をコツコツ貯めて、お孫さんにランドセルや机を買ってプレゼントした人もいます。流されたミシンを買った人もいます。た



■作り手さんと共に

った100円でも、こうしてコツコツと貯めたお金が生活のなかで生きたお金になっています。こうして「まけないぞう」がこの7年間被災者の心の支えになっているのです。

いつも「まけないぞう」のために集まる大船渡の仮設では「まけないぞうの日」があります。この日は、元々仮設に住んでいた人、住んでいる人もみんな集まって「まけないぞう」づくりをします。作り手さんの中には、復興住宅に引っ越した人もいますが、「私の部屋の上も、下も空いているよ！あ～今日はみんながよく話して、よく笑った！！今日はいのちの洗濯したな～。笑いが一番いいな～」と話してくれました。新しくできた家でも疲れがでて、病気になるって入院した人、精神的にうつっぽくなった人などもいらっしやいます。

また、「津波の時に、孫や娘たちと離れてから具合が悪くなった。春や秋など季節の変わり目は特に調子が悪いの。(再建)環境が変わったせいもある。仮設の時はよかったよ。集会所もあって、みんなとしゃべって、『おーい』って言えば、『はい』って声かけあって。今は近所でも誰も話さない。家で一人っ子だもの。復興っていつでも誰も話さないよ。同じ町にいてもね・・・。」と淋しげに語られる作り手さんもいます。

待ちに待って新しい家ができたにも関わらず、生活感が感じられないのです。人工的にできた町に子どもの声も聞こえず、人がいるはずなのに、人の気配がしない、これが本当に住民たちが待ち望んでいた復興なのか、...

「岩手、宮城、福島3県の沿岸など35市町村で震災前と比

べて17万人以上減った。住まいの再建は進んでいるものの、急激に落ち込んだ人口の回復にはつながっていない。」(読売新聞3月10日)と伝えています。

私たちは、「まけないぞう」を必要としている人たちがいる限り、続けていきたいと思っておりますので、どうぞ今後ともご支援・ご協力のほどよろしく願いいたします。現在、「まけないぞう」の在庫を抱えています。ご友人や知人などに販売のご協力を広げて頂ければ幸いです。

～まけないぞうオンラインショップのお知らせ～

まけないぞうはインターネットのオンラインショップでも販売をしております。ぜひご購入をお願い致します。

<http://makenaizou.cart.fc2.com>



右のQRコードからオンラインショップにアクセスできます。

～支援者からのメッセージ～



東日本大震災からもうすぐ7年になりますが、あの時の驚きは今でも色あせることはありません。先日、新聞に災害公営住宅の完成が来年度になると出ていました。仮設での不自由な生活の中で、ぞうさん作りが気分転換に役立っているのだろうと想像しています。タオル少しですが、皆さんのお役に立つと幸いです。季節の変わり目です。ご自愛の程。(神奈川県在住)

特集

熊本地震救援活動

一昨年4月に発生した熊本地震。当センターでは、西原村 reborn ネットワークを通じ、継続して支援活動を展開しています。詳しい活動内容などは、HP (<http://blog.livedoor.jp/kyodocenter-kumamotojishin/>) をご覧ください。

熊本地震からまもなく二年となります。被災地では、宅地造成の建設予定が進んできており、復興住宅の建設も進みつつあり、被災地の様子は変わりつつあります。

こうした状況の中、住民の方々はそれぞれ動き出しています。巻頭言にもあるように、東北への視察に行くグループが出て来ました。12月に行なった新潟・中越への視察と合わせての報告会を行おうという話も盛り上がって来ています。婦人会とは別に、婦人会のOGの方々も宮城への視察に行くなど、住民同士の活動が刺激となってそれぞれの動きを活性化しています。

西原村 reborn ネットワークでは、前号でも紹介した地元学による村歩きとMAPづくりを進めています。今回は、村の中でも葛目地区に焦点を絞ってMAPを作成しています。このMAPをきっかけにしながら、地元の住民の方々が再び地元のことを学び、その地域らしい復興の一助となることを狙っています。

このように地元の方々の活発な動きを支えつないでいく

活動を今後も継続していきたいと思えます。今後ともご協力をよろしくお願ひします。

(頼政良太)



特集

九州北部豪雨災害救援活動

昨年7月に発生した九州北部豪雨災害。当センターでは、大分県日田市にてひちくボランティアセンターを通じた支援活動を展開しています。詳しい活動内容などは、HP (<http://blog.livedoor.jp/kyodocenter-kyusyugou/>) をご覧ください。

昨年の豪雨災害で被害を受けた日田市では、現地支援団体であるひちくボランティアセンターが継続して支援活動を行なっています。

田んぼや畑の泥を除去する作業もまだ全てが終わって



るわけではありません。国による保証は査定に時間がかかるため、いまだに手付かずの田んぼが多い中、待ちきれないという方もいらっしゃいます。

また、みなし仮設住宅（民間賃貸住宅を仮設住宅とみなして入居する制度のこと）に入居されている方もまだたくさんいらっしゃいます。

ひちくボランティアセンターでは、こうした状況の中、地道に作業をするボランティアを募集しながら活動を展開しています。みなし仮設住宅に対しては、ケアマネジャーの有志の方々と共に、訪問活動を行なっています。

水害は、地震と違い毎年のように発生しています。日田市でも五年前に大きな水害を受け、さらに昨年の水害にもあったという地域です。今の大きな課題は、今年の梅雨時期の雨対策をどのようにしていくのか？ということです。十分に復旧されていない地域では、再び土砂崩れが起きるのではないかと不安の声が上がっています。

災害からの復旧だけでなく、今回の経験をどうやって次の災害の備えに繋げるのかということが、日田市の被災地では大きな課題となっています。

当センターとしては、ひちくボランティアセンターを通じての支援をしていきたいと考えています。今後ともご支援ご協力をお願いします。(頼政良太)